

外交官生活を始めて38年になる。オセアニアや南米には出張で何度も行ったことがあるが、南半球暮らしは、今回のオーストラリア勤務が初めて。

「どう？」とよく聞かれる。わずか半年余りで断言するつもりはないが、一番印象に残ったのは「季節逆転」である。

日豪間に時差はほとんどない。だから、アメリカやヨーロッパに比べれば、飛行機での移動ははるかに楽だ。日本のテレビニュースを同じ時間帯に見られるのもうれしい。その意味で、日本は近い。

だが、日本列島が桜色に覆われる時期に紅葉を迎え、神戸の人々が流れる汗を押さえて日陰を探す頃に、キャンベラは霜の朝に震える。そんな時、日本との果てしない距離を感じる。

「ダウン・アンダー」という言葉がある。英語で豪州を指す。もちろん、文脈や使い手によるが、しばしば、地図の底にあるという揶揄の念が垣間見える言葉でもある。先日、豪州大陸の南東部沖にあるタスマニア島を訪問した。北海道位の大きさのこの島を「ボト

南北逆転

随想

山上 信吾

ム・オブ・ザ・ワールド（世界の底）」と表現する人がいて、強く印象づけられた。

豪州で暮らして面白いのは、独特の動植物がふんだんに見られることである。カンガルー、コアラは有名だが、エミューやウォンバットもいる。コカトウという鳥の鳴き声のけたたましいこと。マグパイの鋭い嘴は、歩行者やサイクリストを警戒させる。

豊穡な陽光と乾いた気候のため、緑はおとなく青空は抜けるように高い。街灯もまばらな漆黒の闇夜は、光り輝く南十字星が照らしてくれる。こんな環境で暮らしていると、今まで使っていなかった脳の半分が刺激を受けて若返る気分になる。これから、そんな生活の一面を紹介していきたい。



やまがみ・しんご 駐豪州日本大使。1961年東京生まれ。東大法卒。84年

外務省。米国、香港、ジュネーブ、英国などで勤務。警察庁出向、国際情報統括官、経済局長などを経て2020年

12月から現職。